

社会心理学研究 第17巻第1号  
2001年, 43-54

## アジア系留学生と日本人学生の相互知覚ギャップ：女子の大学生に対する実験<sup>1)</sup>

勝谷紀子<sup>2)</sup>・山本直美・坂元 章（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科）

The interpersonal perception gap of Japanese native students and Asian foreign students in Japan: An experiment of female university students

Noriko KATSUYA, Naomi YAMAMOTO and Akira SAKAMOTO (*Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University*)

We conducted an experiment to examine if there were discrepancies in the inference of intention and consequence of other's interpersonal behavior between native students and foreign students in Japan and if the discrepancies prevented the native and foreign students from a need for interacting with each other, which led to actual interactive behaviors. After 337 native female students and 73 Asian foreign female students at Ochanomizu University read two fictitious episodes describing that the characters of foreign students were interacting with the characters of native students, we asked them to infer the native and foreign characters' intention and consequence of interpersonal behavior. Consequently, we obtained some results indicating a perception gap, that is, the native female subjects regarded the foreign characters' intention and consequence as being more unfriendly and unfortunate respectively than the Asian foreign subjects did, and vice versa for the native characters' intention and consequence. In addition, structural equation modeling based on the data by the native female subjects suggested that such perception affected the amount of the native students' interaction with the Asian foreign students through the native students' need for the interaction.

Key words: Asian foreign students, perception gap, communication gap, cross-cultural interaction, and structural equation modeling

キーワード：アジア系留学生、知覚ギャップ、コミュニケーション・ギャップ、異文化交流、構造方程式モデル

### 問 題

本研究は、留学生と日本人学生の相互交流をはばむ原因の一つと考えられる、相互知覚のギャップについて、女子大学のアジア系留学生と日本人学生を被験者として検討することを目的としたものである。

留学生に対して、経済的援助をはじめとした様々なサポートを行い、21世紀までに10万人の留学生を受け入れることを目指した「留学生10万人受け入れ計画」を文部省（現：文部科学省）が打ち立ててから15年以上が経過した。日本への留学生数は、一時期順調な伸びを示していたが、ここ数年は5万人台前半で横ばい状態であり、当初の目標であった10万人には程遠い数字である（「我が国の文教施策（平成11年度）」、2000）。日本における外国人留学生の出身地域別内訳をみると、

外国人留学生のほとんどがアジア系留学生であり、外国人留学生全体に占める割合が89.5%を占めている（平成10年5月1日現在）。国別に見ると中国からの留学生が最も多く、次いで韓国、台湾という順になっている（「我が国の文教施策（平成11年度）」、2000）。彼らは、日本への留学を無事果たした後も、その多くがさまざまな問題を抱えつつ勉学に励んでいるのが現状である（e.g., 岩男・萩原, 1988）。

留学生の抱える問題の一つとしてあげられるのが対人関係である（長井, 1988）。日本人学生との交流を強く望んでいるものの、その一方で日本人学生の友達がいない、日本人学生の友達ができにくいと訴えている留学生たちは多い（柄原, 1996）。したがって、実際に留学生と日本人学生の相互交流がうまくいっているとは必ずしもいえないのが現状である。そのため、適切なソーシャルサポート（e.g., 周, 1993; Jou, & Fukada, 1995）が得られないといった問題が生じ、日本での生活に適應できないといった問題が考えられる。したがって、留学生と日本人学生との交流を妨げている要因を明らかにし、改善をしていくことが急務であろう。

1) 本研究は、文部省（現：文部科学省）特定研究「異文化教育のための情報システムの構築」（研究代表者：徳丸吉彦）の一環として行われ、その遂行にあたり助成金を受けた。深謝したい。

2) 現所属：東京都立大学大学院人文科学研究科

留学生と日本人学生との関係に影響を及ぼすと思われる要因としては、これまで差別、カルチャーショック (e.g., 星野, 1980; Furnham & Bochner, 1986; 多田, 1995)、あるいは、ソーシャルスキル (e.g., 田中, 2000; 田中・藤原, 1992) などが指摘され、その影響が検討されてきた。その他に考えられる原因として本研究で取り上げるのが、相互知覚ギャップである。すなわち、ある人が特定の行動をなぜとったのか、その結果どのような気持ちでいるのか、その後どのような行動をとるのか、などについて考える際、行動をとった本人と観察者との間でギャップが見られる、というものである。

留学生と日本人学生は、お互いにとって外国人であり、さまざまな特性を持ったユニークな個人として相手を捉えるよりも、「日本人の人たち」、「留学生の人たち」のようにあいまいな外集団として知覚しているかもしれない (e.g., Tajfel, 1978)。一般に、外集団成員のとった行動はネガティブに、内集団成員のとった行動はポジティブに知覚されることが知られている (e.g., Tajfel, 1982)。そのため、ある行動をとった人物が属する集団成員が、その行動をポジティブに知覚するのに比べて、外集団成員はその行動をネガティブに知覚することが考えられ、双方で行動の知覚ギャップが起こっていることが予想される。そのため、日本人学生の場合では、外集団成員である留学生のとった行動についてネガティブに、内集団成員である他の日本人学生のとった行動についてポジティブに評価することが考えられる。一方、留学生の場合では、それとは逆の事態が起こることが考えられる。

こうしたことから、たとえば、相手がどんな意図でその対人行動をしたのか、その対人行動のために相手がどのような感じを持ったのか、といった対人行動の意図や結果に関して、実際に相手が知覚しているよりもお互いにネガティブに知覚している可能性がある。たとえば、留学生が、日本語をうまく話せないのに話しかけては日本人学生に悪いと思って黙っていたのに対して、日本人学生の方は自分たちと話したくないから留学生は黙っているのだろう、と悪意に受け取ってしまうことなどがこれにあたるであろう。もし、お互いがこうした知覚をしているとすれば、たとえ積極的に相手との交流を避けようという意図がなかったとしても、そのためにますます日本人学生と留学生の相互交流が乏しくなっていく可能性があるだろう。実際に、日本人学生が善意から留学生に対して金銭や生活必需品の援助をしても、それが必ずしも単なる善意としてストレートに伝わらず、留学生が援助を断るような事例がある (渡辺, 1995)。

このように、日本人学生と留学生の間でコミュニケーションのギャップが生じる事例は、これまでに多く報告されている (e.g., 横田・堀江, 1994)。しかし、実際に、自己評価すなわち実際の本人の知覚と比較した上で対人

知覚ギャップがあるかどうかを検討した研究は少なく、特に、日本人学生と留学生を被験者として取り上げて相互知覚ギャップを検討した研究は、われわれの知る限りこれまでにない。それゆえ、現在のところ、2者間で知覚ギャップが本当に起こっているのかどうかは明らかにされていない。そこで、本研究では他者からの知覚に加えて本人の知覚も測定した上で、日本人学生と留学生、とくにアジア系留学生との間に知覚ギャップが検出されるかどうかを検討する。もし、両者の間の相互知覚ギャップを見出せば、異文化交流を促進するために、そうしたギャップをなくすことが方策の1つであることが指摘されることになる。

以上のように、本研究では、第1の目的として、日本人学生とアジア系留学生の被験者の間で、互いの対人行動の意図および結果に対する知覚のギャップが見られるかを検討する (以下、アジア系留学生の被験者を留学生被験者、日本人学生の被験者を日本人被験者と呼ぶ)。そして、そのように相手の行動の意図や結果をネガティブに知覚することによって、実際に、相手と接触したいという接触欲求や相手との接触量が減少しているかを検討する。これを第2の目的とする。

本研究の仮説は次の4つとなる。まず、第1の目的に関するものとして次の2つがある。

**仮説①** 留学生被験者は日本人被験者よりも留学生の行動の意図をポジティブに知覚し、日本人被験者は留学生被験者よりも日本人学生の行動の意図をポジティブに知覚しているであろう。

**仮説②** 留学生被験者は日本人被験者よりも留学生の行動の結果をポジティブに知覚し、日本人被験者は留学生被験者よりも日本人学生の行動の結果をポジティブに知覚しているであろう。

また、第2の目的に関するものが次の2つである。

**仮説③** 日本人学生に対してネガティブな知覚をする留学生被験者は、日本人学生に対する接触欲求を低め、それによってさらに実際の接触量を減らすであろう。

**仮説④** 留学生に対してネガティブな知覚をする日本人被験者は、留学生に対する接触欲求を低め、それによってさらに実際の接触量を減らすであろう。

本研究では、自分自身や相手の行動の意図や結果に対する知覚を調べるために、場面想定法を用いた。具体的には、留学生と日本人学生の登場人物がゼミとコンパで相互作用する架空の物語をとりあげた。ゼミやコンパの場面をとりあげたのは、これらが日常よく経験する可能性の高い場面であるため、全く経験したことのない非現実的な場面よりも、その状況におかれた際の自分や相手の行動についてより考えやすいのではないかと考えたためである。これらの物語をアジア系留学生と日本人学生の被験者に読ませ、物語の中でそれぞれの登場人物が

## 勝谷・山本・坂元：アジア系留学生と日本人学生の相互知覚ギャップ

とった対人行動について、なぜその行動をとったのか、その行動をとった後に登場人物が嬉しいと感じたかどうか、相手と親しくなれたと感じたかどうか、今後親しくなれるかどうかを回答させた（以下、留学生の登場人物を留学生登場人物、日本人学生の登場人物を日本人登場人物と呼ぶ）。こうした回答はあくまで架空の登場人物の知覚を推測してなされるものであるが、そこには、現実における被験者自身の知覚の仕方が反映されると考えられる。なお、場面想定法による測定には、社会的望ましさの影響が考えられるが、本研究では、それを統制し

た分析を行った。

なお、仮説③の検討のために Figure 1 のパスモデルを、仮説④の検討のために Figure 2 のパスモデルを分析する。Figure 1 のモデルでは、留学生被験者の場合は、その時点での日本語能力や在籍期間が各変数に影響する可能性があるため (e.g., 岩男・萩原, 1988; 山崎, 1993; cf., 山崎, 1994)、その変数を統制変数として加えた (Figure 1 は、日本語能力を統制した場合のモデル)。

## 方 法

## 被験者

被験者は、お茶の水女子大学の日本人女子学生のうちランダムに抽出された 504 名、その大学の留学生全員にあたる 152 名 (中国人、韓国人、台湾人、それ以外) であった。質問紙の回収率は日本人学生が 67%、留学生が 48% であった。最終的に分析対象となった被験者は、日本人学生が 337 名 (学部 284 名、修士課程 35 名、博士課程 18 名)、留学生が 73 名 (学部 10 名、修士課程 16 名、博士課程 17 名、学部研究生 18 名、大学院研究生 8 名、不明 4 名; 中国人 38 名、韓国人 19 名、台湾人 8 名、それ以外 7 名、不明 1 名) であった。

このように、本研究における留学生被験者もアジア系留学生で占められていた。そのため、日本においてアジア系留学生が外国人留学生全体の 9 割近くを占めている現状を十分反映していると考えられる。なお、被験者はすべて女性であった。

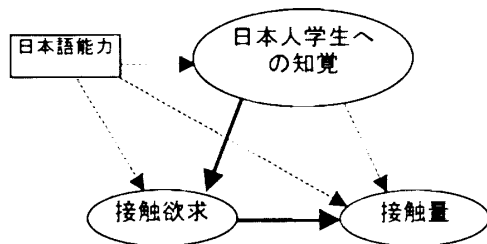


Figure 1 留学生被験者に関するパス図

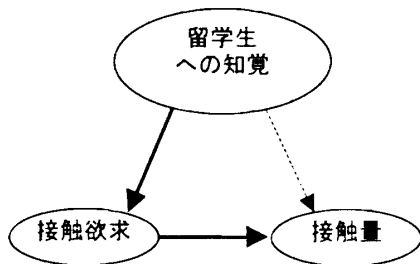


Figure 2 日本人被験者に関するパス図

Table 1 調査に用いた架空の物語

## 問題 1

お茶の水女子大学では、後期から学部共通科目として H 先生の講義がはじまりました。1 回目の授業の出席者は 6 人 (そのうち、4 人は日本人学生、2 人は留学生) で、皆互いに初対面でした。2 人の留学生は、日本語を聞き取る力は充分ですが、話す力は少し不十分でした。1 回目の授業が終わった後、日本人学生の I さんがプロ野球の日本シリーズのことを口にする、他の 3 人の日本人学生は口々に話をしました。しかし、①留学生の 2 人は黙って聞いていました。しばらくして、日本人学生の J さんが、この講義の受講生でコンパをしようという始めました。他の 3 人の日本人学生はすぐに賛成しましたが、留学生の 2 人はとまどっていました。しかし、②日本人学生が口々にさそうと、③最初のうちは乗り気ではなかった 2 人ですが、最終的には行くこと答えました。

## 問題 2

コンパの日になりました。コンパの初めのうちは、日本人学生の K さんがバーゲンの話をして、他の 3 人の日本人学生はこの話に夢中になりました。しかし、留学生の 2 人は黙って聞いていました。次に、日本人学生は留学生に質問をし始めました。④いつ日本に来たのか、日本に来る前は何かをしていたのか、家族は何人で何をしているのか、などと聞きました。しかし、そのうちに聞くことができなくなりました。すると今度は、⑤留学生の L さんが日本人学生に質問をし始めました。まず、⑥日本人学生に興味のことを聞きました。それをきっかけにして、しばらく話が続きしました。その後、L さんは L さんの母校の偉人 M について知っているかと聞きました。また、L さんの母国での、ある歴史的な事件について知っているかとも聞きました。しかし、⑦日本人学生はこの話にはあまり反応せず、話しははずみませんでした。

注: 傍線を引いた部分は、被験者に回答を求めた対人行動。

## 質問紙

次のような質問項目から構成されていた。

**対人行動の意図および結果の知覚** 留学生と日本人女子学生の登場人物が、大学のゼミでの初対面場面（問題1）とその後のコンパ（問題2）で相互作用する逸話を2つ作成した（Table 1）。そこでの登場人物の7つの対人行動それぞれについて、その意図および結果を推測させた。なお、対人行動の意図は問題1と2で、対人行

動の結果については問題2で尋ねられた。

まず、対人行動の意図については、日本人登場人物、留学生登場人物が示した対人行動（Table 1で①、②、③、⑤、⑦とされているもの）の1つ1つについて、その理由をいくつか並べ、それぞれがどのくらいありそうかを「(1)かなりありそうである」～「(5)全くありそうでない」の5点尺度で評定させた。それらの項目はTable 2に示した。Table 2では、留学生登場人物のも

Table 2 対人行動の意図に対する知覚の測定に用いた項目・固有ベクトル

項 目	第1主成分
<b>留学生に関する項目</b>	
①留学生は、この話題に興味がなかった。	.63
①留学生は、日本人学生ととくに親しくなりたいと思わなかった。	.70
①留学生は、自分が話に参加すると、自分の日本語がうまくないので会話がスムーズでなくなり、日本人学生に迷惑になると思った。	-.52
③留学生は、自分がコンパに行くと、自分の日本語がうまくないので会話がスムーズでなくなり、日本人学生に迷惑になると思った。	-.56
③留学生は、日本人学生と親しくなりたいと思わなかった。	.56
⑤留学生は、日本人学生と親しくなりたいと思った。	-.42
⑤留学生は、自分が会話に参加しないと、日本人学生がそれを気にすると思った。	-.21
<b>日本人学生に関する項目</b>	
①日本人学生は、留学生はこの話題に興味を持たないだろうと思った。	.14
①日本人学生は、留学生に話かけると、会話がスムーズでなくなるので、話しかけたくないと思った。	.75
①日本人学生は、留学生ととくに親しくなりたいと思わなかった。	.82
⑦日本人学生は、この話題を続けていると、留学生に対して何か失礼な発言をしてしまうかもしれないと思った。	.04
⑦日本人学生は、この話題に興味がなかった。	.33
②日本人学生は、留学生と親しくなりたいと思った。	-.66
②日本人学生は、留学生を仲間はずれにしたいと思った。	-.03

注：丸数字は Table 1 における各行動文につけられた数字と対応しており、どの行動文について尋ねたものかを示している。

Table 3 対人行動の結果に関する質問項目

## 嬉しさ

## 留学生

- ④留学生は日本人学生が自分のことを聞いてくれて嬉しかった。
- ⑥留学生は、日本人学生と話ができて嬉しかった。

## 日本人学生

- ④日本人学生は、留学生と話ができて嬉しかった。
- ⑥日本人学生は、留学生が自分のことを聞いてくれて嬉しかった。

## 親しさ

- 留学生は、日本人学生と親しくなれたと感じた（問題2全体から）。
- 日本人学生は、留学生と親しくなれたと感じた（問題2全体から）。

## 親しさの期待

- 留学生は、日本人学生と今後さらに親しくなれるだろうと思った（問題2全体から）。
- 日本人学生は、留学生と今後さらに親しくなれるだろうと思った（問題2全体から）。

注：丸数字は Table 1 における各行動文につけられた数字と対応しており、どの行動文についてたずねたものかを示している。

## 勝谷・山本・坂元：アジア系留学生と日本人学生の相互知覚ギャップ

のと日本人登場人物のものに項目を分けている。なお、これらの項目は、留学生被験者と日本人被験者のいずれでも共通であった。

次に、対人行動の結果については、(1)嬉しいと感じたかどうか(嬉しさ)、(2)親しくなれたかどうか(親しさ)、(3)今後ますます親しくなれるだろうと思ったかどうか(親しさの期待)に関して、留学生被験者と日本人被験者のいずれにも、対人行動の意図と同様に「(1)まったくそうであった」～「(5)まったくそうでなかった」の5点尺度で評定させた。測定に用いられた項目をTable 3に示した。Table 3にあるように、嬉しさは、④と⑥に関するものとして、親しさと親しさの期待は、問題2の物語全体に関するものとして尋ねられている。

**相手との接触量** 現実の日常生活の中で、「会って立ち話をする」「一緒に昼ご飯を食べる」「電話で話をする」「大学以外の場で個人的に会う」の4種類の接触行動について、留学生被験者では日本人学生と、日本人被験者では留学生とどれくらいの頻度でしているかを「(1)0回」～「(7)100回以上」までの7点尺度で評定させた。

**相手との接触欲求** 接触量の測定において尋ねた接触行動のそれぞれについて、留学生被験者では日本人学生と、日本人被験者では留学生とどのくらいしたいかを、「(1)とてもそう思う」～「(3)今のままでよい」の3点尺度で評定させた。

**日本語能力** 留学生被験者のみに対して、日本人の日本語能力を100%としたときの、自分の聞く力、話す力、書く力、読む力、質問紙の日本語の理解度についてそれぞれ「(1)20%以下」、「(2)約30%」、「(3)約40%」、「(4)約50%」、「(5)約60%」、「(6)約70%」、「(7)約80%」、「(8)約90%」、「(9)約100%」までの9点尺度で評定させた。聞く力、話す力、書く力、読む力の各評定値の合計点を「日本語能力」として分析に用いた。

**在籍期間** 留学生被験者に対しては、大学での在籍期間について「(1)半年未満」から「(7)5年以上」までの7点尺度で尋ねた。

**社会的望ましさ** MPI (Maudsley Personality Inventory; MPI 研究会、1964) の虚偽発見尺度のうち10項目を用いて、「(1)はい」、「(2)どちらでもない」、「(3)いいえ」の3点尺度で評定させた。日本語を母国語としない留学生の負担を減らす必要から、原本の20項目のうち10項目を無作為に選んだ。10項目の合計得点を用い、得点範囲は10から30点であった。なお、項目の選択にあたって、尺度の次元性を強めるために、20項目の合計得点との相関が高い項目を選ぶなどの方法が考えられるが、この場合、特定の内容の項目が偏って選ばれる可能性がある。例えば、尺度の中に、内容がとくに類似した項目が多くある場合、合計得点はその内

容を大きく反映したものとなるため、それらの項目の得点は合計得点と高く相関し、結果として、そうした項目が選ばれやすくなる。無作為な項目選択では、こうした問題は生じず、原本における尺度の内容的妥当性を保持する点で無難であると考えられる。このことから、本研究ではこの方法を採用した。

**その他** 学年、配偶者や子供の有無、出身国(留学生被験者のみ)などについて尋ねた。

**手続き**

調査は、質問紙を直接配布あるいは郵送し、回収する方法で実施した。

**結 果****留学生の日本語能力**

留学生が本研究の質問の日本語を理解できたかどうかを確認するため、留学生被験者73名による各日本語能力の評定値の平均値を求めた。その結果、日本語を聞く能力は6.53、話す能力は5.51、書く能力は5.22、読む能力は6.70、質問紙の理解が8.38であった。このように、留学生は平均して、自分が日本人学生の6割から8割の日本語能力を持っており、質問紙の日本語の9割から10割を理解したと感じていたことが示された。それゆえ、本研究の留学生の日本語能力は十分高く、本研究の質問は理解できていたと判断される。

しかし、これら日本語能力はいずれも自己報告によるものなので、社会的望ましさが回答に影響している可能性も考えられる。そこで、社会的望ましさと各日本語能力および4つの能力を合計した「日本語能力」との相関係数を算出した結果、いずれの能力とも有意な相関が見られないことが示された(聞く力: .08、話す力: .11、書く力: .07、読む力: -.01、質問紙の理解: -.15、日本語能力: .07)。これは、本研究で測定された日本語能力は社会的望ましさに影響されていないことを意味する。

**各変数の相関**

各仮説の検討に入る前に、分析で取り上げる変数間の相関係数を留学生被験者、日本人被験者のそれぞれについて算出した。すなわち、留学生被験者では社会的望ましさ、在籍期間、日本語能力、意図の知覚、嬉しさの知覚、親しさの知覚、親しさの期待の知覚(直前の3変数が結果の知覚となる)、接触欲求、接触量である。日本人被験者では、意図の知覚、嬉しさの知覚、親しさの知覚、親しさの期待の知覚、接触欲求、接触量である。留学生被験者の結果をTable 4、日本人被験者の結果をTable 5に示した。

まず、留学生被験者では、在籍期間と日本語能力の間に相関があること、接触欲求は、在籍期間、日本語能力、意図の知覚、結果の知覚と相関があること、意図の知覚

## 社会心理学研究 第17巻第1号

および結果の知覚の4つの変数はそれぞれ相関し合っていること、社会的望ましさはいずれの変数とも有意な相関が見られないことが示された。

続いて、日本人被験者では、嬉しさの知覚が意図の知覚、親しさの知覚、親しさの期待と相関があること、親しさの知覚は親しさの期待との間に相関が見られることが示された。また、接触欲求はすべての変数と相関が見られることが示された。

## 仮説①の検討

登場人物の対人行動の意図に関する14項目を、日本

人登場人物に関する7項目、留学生登場人物に関する7項目に分けて、それぞれ主成分分析を行った。

日本人登場人物に関する項目では、第1主成分の寄与率は26%であり、第2主成分以下よりも格段に大きく(なお、第2主成分では17%、第3主成分では16%)、また、第1主成分に対する各項目の負荷量を見ても、第1主成分は「親しくなりたい-親しくなりたくない」を示すものと容易に解釈できるものであったので(Table 2)、第1主成分のみを抽出した。対人行動の意図の得点を求めるにあたっては、第1主成分に対す

Table 4 変数間の相関係数(留学生被験者)

	1	2	3	4	5	6	7	8
1 社会的望ましさ	—							
2 在籍期間	.08 (68)	—						
3 日本語能力	.07 (69)	.47*** (72)	—					
4 意図	.18 (67)	-.13 (70)	-.20 (71)	—				
5 嬉しさ	.05 (68)	.13 (71)	-.09 (72)	.54*** (71)	—			
6 親しさ	.11 (67)	-.21 (70)	-.21 (71)	.64*** (71)	.59*** (71)	—		
7 親しさの期待	.02 (68)	-.10 (71)	-.23 (72)	.65*** (71)	.65*** (72)	.81*** (71)	—	
8 接触量	-.08 (69)	.22 (72)	.06 (73)	.04 (71)	.02 (72)	.02 (71)	.07 (72)	—
9 接触欲求	.01 (69)	-.26* (72)	-.32** (73)	.30* (71)	.26* (72)	.32** (71)	.30** (72)	-.03 (73)

注: \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ , カッコ内はデータ数。

Table 5 変数間の相関係数(日本人被験者)

	1	2	3	4	5	6
1 社会的望ましさ	—					
2 意図	-.09 (330)	—				
3 嬉しさ	.00 (331)	.38*** (333)	—			
4 親しさ	.03 (331)	.05 (333)	.44*** (334)	—		
5 親しさの期待	-.04 (331)	-.02 (333)	.34*** (334)	.65*** (334)	—	
6 接触量	.04 (328)	.03 (327)	.03 (328)	.05 (328)	.07 (328)	—
7 接触欲求	-.11* (332)	.17** (333)	.21*** (334)	.13* (334)	.16** (334)	.22*** (329)

注: \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ , カッコ内はデータ数。

## 勝谷・山本・坂元：アジア系留学生と日本人学生の相互知覚ギャップ

Table 6 対人行動の意図および結果の知覚

	留学生登場人物		日本人登場人物	
	留学生 被験者	日本人学生 被験者	留学生 被験者	日本人学生 被験者
対人行動の意図	3.66 <sup>a)</sup>	3.59	2.90	3.33
嬉しさ	3.68 <sup>b)</sup>	3.65	3.46	3.70
親しさ	3.28	2.93	3.15	3.15
親しさの期待	3.59	2.97	3.29	3.12

注：a) 得点が高いほど、登場人物が親しくなりたいという意図を持っていたと評定している。b) 得点が高いほど、登場人物が嬉しいと思っていたと評定している。

る負荷量の低い項目（「日本人学生は、留学生はこの話題に興味を持たないだろうと思った」「日本人学生は、留学生を仲間はずれにしてはいけないと思った」「日本人学生は、この話題を続けていると、留学生に対して何か失礼な発言をしてしまうかもしれないと思った」）を除いた4項目の平均得点を用いることにした。

一方、留学生登場人物に関する項目では、第1主成分の寄与率は29%であり、第2主成分以下よりもかなり大きく（第2主成分では22%、第3主成分では13%）、第1主成分に対する負荷量についても、日本人登場人物の場合と同様の解釈が容易にできることから、第1主成分のみを抽出した。意図の得点については、負荷量の低い項目（「留学生は、自分が会話に参加しないと、日本人学生がそれを気にすると思った」）を除いた6項目の平均得点を用いた。

こうして算出した意図得点について、社会的望ましさの影響を統制するためにそれを独立変数として加え、登場人物別に2（被験者：留学生 vs. 日本人学生）×2（社会的望ましさ：高 vs. 低）の2要因の分散分析を行った（Table 6）。なお、社会的望ましさについてはメディアン分割により高群（ $M=20.53$ ）、低群（ $M=16.16$ ）の2群に分けた。

その結果、日本人登場人物に関して被験者の主効果が見られ（ $F(1, 394)=31.81, p<.0001$ ）、日本人被験者の方が留学生被験者よりも日本人登場人物の行動の意図を有意にポジティブに評定していた。これは仮説①を支持する結果である。その他に、社会的望ましさの主効果が見られ（ $F(1, 394)=5.00, p<.05$ ）、望ましさ低群（ $M=3.27$ ）の方が高群（ $M=3.25$ ）よりも行動の意図をポジティブに評定していた。さらに、被験者×社会的望ましさの交互作用効果が見られた（ $F(1, 394)=6.55, p<.05$ ）。被験者別に $t$ 検定を行った結果、留学生被験者の場合では、社会的望ましさ高群（ $M=3.04$ ）の方が低群（ $M=2.61$ ）よりも日本人登場人物の行動の意図をポジティブに評定していたが（ $t(65)=-2.67, p<.01$ ）、日本人被験者の場合では、社会的望ましさによる有意差が出なかつ

た（ $t(329)=.41, n.s.$ ；社会的望ましさ高群： $M=3.31$ 、社会的望ましさ低群： $M=3.34$ ）。

一方、留学生登場人物に関しては有意な結果が得られず（ $F(1, 394)=.41, n.s.$ ）、仮説①は支持されなかった。

まとめると、日本人被験者は留学生被験者に比べて、日本人登場人物がより相手と親しくなりたい意図を持っていると評定していたが、留学生登場人物については被験者による効果が見られなかった。そのため、日本人登場人物に対する知覚に関してのみ仮説①が支持され、知覚ギャップが見られたと言えよう。

#### 仮説②の検討

日本人学生と留学生とて相互作用の結果に対する知覚が異なるかどうかを検討するために、嬉しさの変数（嬉しいと感じたかどうか）、親しさの変数（親しくなれたかどうか）、親しさの期待の変数（今後ますます親しくなれるだろうと思ったかどうか）について、社会的望ましさの影響を排除するために社会的望ましさの得点を独立変数として加え、2（被験者：留学生 vs. 日本人学生）×2（登場人物：留学生 vs. 日本人学生）×2（社会的望ましさ：高 vs. 低）の分散分析を、従属変数ごとに行った。嬉しさについては2項目の平均値を用い、親しさ、親しさの期待についてはそれぞれ1項目のため得点をそのまま用いた（Table 3）。

まず、嬉しさでは、登場人物の主効果が有意で（ $F(1, 395)=5.24, p<.05$ ）、留学生登場人物の方が日本人登場人物よりも嬉しいと感じていたと評定されていた。また、被験者×登場人物の有意な交互作用効果が見られた（ $F(1, 395)=12.08, p<.001$ ）。登場人物別に $t$ 検定を行った結果、日本人登場人物については、日本人被験者の方が留学生被験者よりも有意に高く評定していたが（ $t(404)=2.36, p<.05$ ）、留学生登場人物については有意な結果が得られなかった（ $t(404)=-.61, n.s.$ ）。

次に、親しさについては、被験者×登場人物の有意な交互作用効果が見られた（ $F(1, 394)=16.77, p<.0001$ ）。登場人物別に $t$ 検定を行った結果、留学生登場人物では、留学生被験者の方が日本人被験者よりも有意に高く評定

していた ( $t(89.6) = -2.57, p < .05$ )。日本人登場人物では、有意な結果は得られなかった ( $t(403) = .08, n.s.$ )。その他、社会的望ましさの主効果、被験者×社会的望ましさの交互作用効果も有意であった ( $F(1, 394) = 6.02, p < .05$ ;  $F(1, 394) = 5.24, p < .05$ )。下位分析を行った結果、日本人被験者では社会的望ましさの程度による差が見られなかったが ( $t(329) = -.22, n.s.$ ; 社会的望ましさ高群:  $M = 3.05$ 、社会的望ましさ低群:  $M = 3.03$ )、留学生被験者では社会的望ましさの高い群 ( $M = 3.39$ )の方が低い群 ( $M = 2.86$ )よりも親しさを高く評定していた ( $t(65) = -2.18, p < .05$ )。

最後に、親しさの期待については、被験者の主効果と登場人物の主効果が有意であったが ( $F(1, 395) = 9.88, p < .01$ ;  $F(1, 395) = 3.91, p < .05$ )、被験者×登場人物の有意な交互作用効果も見られた ( $F(1, 395) = 28.95, p < .0001$ )。下位検定として登場人物別に  $t$  検定を行った結果、日本人登場人物では、有意な結果は得られなかったが ( $t(404) = -1.31, n.s.$ )、留学生登場人物では、留学生被験者の方が日本人被験者よりも今後さらに親しくなれると評価していた ( $t(404) = -5.42, p < .0001$ )。

これらの結果をまとめると、留学生被験者は日本人被験者よりも、留学生登場人物が相互作用の後により相手と親しくなれたと感じていて、日本人女子学生と今後より親しくなれるだろうと思った、と評定していた。一方、日本人被験者は、留学生被験者よりも日本人登場人物が相手と相互作用できてより嬉しいと感じていたと評定していた (Table 6)。したがって、留学生登場人物においては親しさと親しさの期待について、日本人登場人物においては嬉しさについて仮説②が支持され、この場合に知覚ギャップが見られたと言えよう。

### 仮説③の検討

日本人学生の対人行動に対する留学生被験者の知覚が接触欲求や接触量に影響しているかどうかを検討するため、構造方程式モデルによる分析を行った。

ここで検討したモデルは、日本人学生への知覚が接触欲求への影響を通して接触量に影響するというものである (Figure 1)。ただし、ここでは、接触欲求と接触量を測定変数として扱い、日本人学生への知覚を(行動の意図の1変数と、結果の3変数によって測定される)1因子の潜在変数として設定した。なお、留学生の場合、口

本語能力あるいは在籍期間が日本人学生に対する知覚や日本人学生との接触欲求および接触量へ影響しそうであるので、これらの変数を統制変数としてモデルに含めることを考える必要がある。その他、これまでの分析で、留学生被験者の場合、社会的望ましさの影響が示される場合があったので、社会的望ましさを含めるモデルも考慮する必要がある。そこでまず、日本語能力、在籍期間、社会的望ましさのそれぞれを1つずつ投入した3つのモデルを比較し、もっとも適合のよいものを参照することにした。

変数の得点化は以下のように行った。接触量については、4つの項目の評定値を標準化した上で合計した。標準化したのは、4種類の接触行動の分散が大きく異なっていたからである。例えば、留学生被験者では、「会って立ち話をする」の平均は3.79、分散は3.05であるのに対し、「電話で話をする」「大学以外で個人的に会う」では、平均はそれぞれ2.96、1.99、分散は、1.62、1.15であった。日本人被験者ではさらに分散の違いは大きく、「会って立ち話をする」の平均は2.38、分散は2.86であるのに対し、「電話で話をする」「大学以外で個人的に会う」では、平均はそれぞれ1.26、1.23、分散は、0.49、0.42であった。このように、「電話で話をする」「大学以外で個人的に会う」に対する平均は低く、分散が小さくなっており、そのままのデータでは影響が小さ過ぎると判断した。標準化することによって、それぞれの項目の影響力を均等にすることができる。分散の違いが大きいのは、とくに日本人被験者のデータにおいてであるが、分析方法を揃えたほうが比較をすることができるという点で望ましいと考え、日本人被験者と留学生被験者の双方のデータで標準化を行うことにした。

接触欲求については、4つの評定値を合計して、得点が高いほど接触欲求が高くなるように逆転させた。日本語能力については、先述したように、聞く力、話す力、書く力、読む力の評定値を合計した。

構造方程式モデル分析では、一般に、取り上げる変数に1つでも欠損値のある被験者のデータが除かれる。その結果、66名が分析対象となった。

分析によって得られた3つのモデルの適合度を Table 7 に示したが、いずれのモデルにおいても適合度は高い

Table 7 各モデルの適合度指標 (留学生被験者のデータ)

モデル	GFI	AGFI	CFI	$\chi^2$
モデル 1: 日本語能力	.982	.955	1	4.08
モデル 2: 在籍期間	.971	.927	1	6.80
モデル 3: 社会的望ましさ	.978	.944	1	5.15

注: モデル名の後に書いてあるのは、統制変数としてモデルに投入した変数



勝谷・山本・坂元: アジア系留学生と日本人学生の相互知覚ギャップ

と言える。しかし、日本語能力を用いたモデルの当てはまりがもっともよく、このモデルの結果を参照するのがよいと考えられる。Figure 3 にそれぞれのパスの効果を示したが、日本人学生への知覚から、行動の意図、嬉しさ、親しさ、親しきの期待に至るパスはすべて有意であり、これは、「日本人学生への知覚」という潜在変数が1因子の構造で解釈可能であり、有効であることを意味している。また、この潜在変数から接触欲求のパスは有意に正であり、日本人学生への知覚がネガティブであるほど接触欲求が低くなることが示唆された。これは仮説③とは同じ方向にある。しかし、接触欲求から接触量へのパスは有意ではないため、仮説③は支持されなかった。また、社会的望ましさ、在籍期間をそれぞれ統制変数として入れたモデル（モデル2、モデル3）においても、個々のパスは同様の結果であった。

なお、日本語能力、在籍期間、社会的望ましさから、2つないしは3つの統制変数を同時に投入したモデルも検討したが、いずれのモデルも Table 7 に示したモデルにくらべ適合度が低いものであった。

さらに、日本人学生への知覚が接触量を通じて接触欲求へ影響するという逆のパスを想定したモデルも検討したが、いずれの統制変数を入れた場合においても、日本人学生への知覚から接触量、接触量から接触欲求への有意なパスは得られなかった。

仮説④の検討

留学生の対人行動に対する日本人被験者の知覚が接触欲求や接触量に影響するかどうかを検討するため、仮説③と同様、構造方程式モデルによる分析を行った。

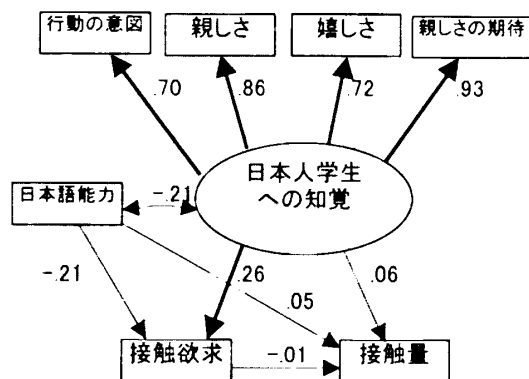


Figure 3 留学生被験者に関するパス図 (太字が有意なパス)

ここで検討したモデルは、留学生への知覚が接触欲求を通して接触量に影響を与えるというものである (Figure 2)。仮説③の場合と異なり、日本語能力や在籍期間は投入されない。また、これまでの分析で、日本人被験者の場合には、社会的望ましさの影響は見出されなかったため、これも投入しなかった。なお、分析対象は、1つでも欠損値のある被験者のデータが除かれた結果、325名となった。

分析では、まず、接触欲求と接触量を測定変数として扱い、留学生への知覚を（行動の意図の1変数と、結果の3変数によって測定される）1因子の潜在変数として設定した。その結果、モデル全体の適合度は低いものの (Table 8)、留学生への知覚から行動の意図に至るパスは有意ではなかった (Figure 4)。従って、留学生への知覚を1因子の潜在変数として扱うことには無理があるように見える。

そこで、留学生への知覚を、留学生の意図への知覚という測定変数と、（行動の結果に関する3変数によって測定される）留学生の結果への知覚という潜在変数の2因子に分けた。なお、留学生の意図への知覚を潜在変数とすると、適切な解は求まらない。留学生の意図への知覚は、1つの変数だけによって測定されており、これを潜在変数とするとパラメータが多くなり過ぎるためであると考えられる。

Figure 5 に2因子モデルの結果のパス図を示した。これによれば、留学生の結果への知覚が1因子の潜在変数であることがまず確認される。モデル2の適合度は、モデル1のそれとあまり変わらないが (Table 8)、

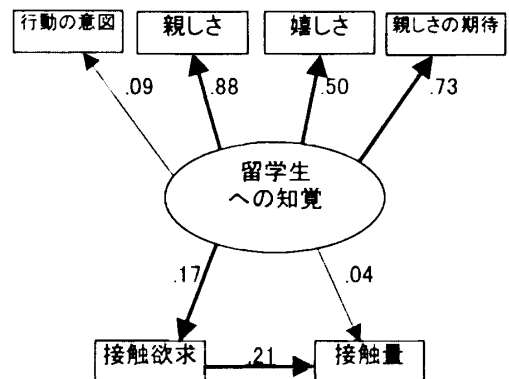


Figure 4 日本人被験者に関する1因子モデルのパス図 (太字が有意なパス)

Table 8 各モデルの適合度指標 (日本人被験者のデータ)

モデル	GFI	AGFI	CFI	$\chi^2$
モデル1: 1因子を仮定	.930	.816	.801	73.67
モデル2: 2因子を仮定	.940	.791	.817	66.52

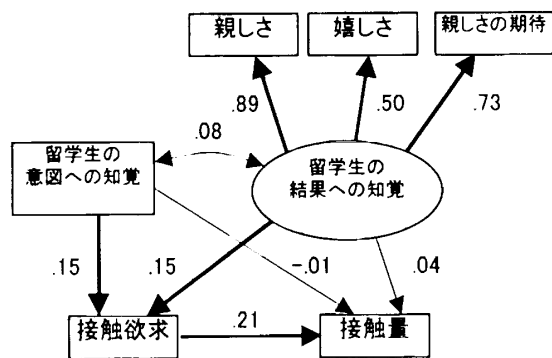


Figure 5 日本人被験者に関する2因子モデルのパス図(太字が有意なパス)

潜在変数の設定がより適当であると見なせるので、モデル2の結果を参照したほうがよいと考えられる。また、Figure 5によれば、留学生の意図への知覚、留学生の結果への知覚のいずれもが、接触欲求に正に影響し、さらに、その欲求が接触量に正に影響しているという流れがある。これは、留学生に対してネガティブに知覚することが、接触欲求を低め、さらにそれが実際の接触量を減らすことを示唆するものであり、仮説④を支持する結果であると言える。

なお、仮説③の検討と同様、対人知覚が接触量を通じて接触欲求へ影響するという逆のパスを想定したモデルも検討した。1因子の潜在変数を想定したモデル、2因子を想定したモデルのいずれにおいても接触量から接触欲求へのパスは有意であったが、留学生への知覚から接触量へのパスは有意ではなかった。そのため、留学生への知覚が接触量を通じて接触欲求に影響するというモデルは支持されなかった。

## 考 察

本研究には2つの目的があった。第1の目的は、アジア系女子留学生および日本人女子学生を被験者として、外国人留学生と日本人学生の間相互知覚ギャップがあるかどうかを検討することであった。仮説①と仮説②の検討によって、そのギャップの存在を示唆する結果がしばしば得られた。例えば、仮説①は、日本人登場人物について支持され、仮説②は、日本人登場人物の嬉しさ、留学生登場人物の親しさと親しさの期待について支持された。これらの場合については相互知覚ギャップの存在が示唆されたと言える。

なお、仮説②の結果は、3つの従属変数(嬉しさ、親しさ、親しさの期待)のそれぞれについて、日本人登場人物か留学生登場人物のどちらかでしか仮説②は支持されないというものであったが、これは、登場人物別の $t$ 検定によって示されたものである。いずれの従属変数でも、分散分析では被験者×登場人物の交互作用効果は有

意になっている。登場人物別の $t$ 検定においては、日本人被験者と留学生被験者の結果の違いは、両者の一般的な評定の傾向に影響される。例えば、日本人登場人物については、留学生被験者が日本人被験者よりもネガティブに評定するという結果は得られず、仮説②は支持されなかったが、ここでもし、留学生被験者のほうが、日本人被験者よりも、一般に、親しさの期待をポジティブに評定する傾向があるとすれば、留学生被験者のほうが日本人被験者よりも、日本人登場人物をネガティブに評定するという結果はもともと得られにくいものである。本研究での日本人登場人物の親しさの期待に関する結果も、そうした一般的な評定の傾向によってかき消されたものかもしれない。一般的な評定の傾向は、仮説②の分散分析における被験者の主効果の部分によって捉えられており(親しさの期待については、主効果は実際に有意である)、交互作用効果はその影響を受けない。もし、一般的な評定の傾向を分離すべきであるとすれば、相互知覚ギャップの有無を判定する対象として、その交互作用効果に注目したほうがよいことになる。それを分離すべきかどうかは、その傾向の内容によるものと考えられ(例えば、それが質問文の解釈や評定スタイルだけによるものであれば、分離すべきであろう)、これは本研究では明らかにはできないが、いずれにしても、3つの従属変数のすべてにおいて交互作用効果が有意であったということは、留学生被験者と日本人被験者の間で行動の結果について相互知覚ギャップが存在するという可能性を強めるものと言えよう。

本研究の第2の目的は、相手に対してネガティブな知覚の仕方をする、接触欲求が低まり、さらにそれによって、実際の接触量も減ってしまうという可能性を検討することであった。仮説③と仮説④の検討によって、留学生被験者についてはこうした可能性は支持されなかったが、日本人被験者についてはこうした可能性を示唆する結果が得られた。また、留学生被験者については、日本語能力の影響も検討したが、実際にはこの影響はあまり見出されなかった。これは、日本語能力を取り上げたいくつかの先行研究(e.g., 早矢仕, 1997; 山崎, 1993; cf. 山崎, 1994)と一致するものである。日本語能力は、それ自体が直接に対人知覚の仕方に影響を及ぼさないのかもしれない。

以上のように、本研究では、アジア系女子留学生の被験者と日本人女子学生の被験者の間に、相互知覚ギャップが存在することを示唆する結果がしばしば得られた。そして、日本人被験者については、相手に対してネガティブに知覚することが、接触欲求さらには実際の接触量を減少させている可能性さえも示唆された。こうした結果は、相互知覚ギャップに関する教育に意味があること、アジア系留学生と日本人学生の相互交流を促した

## 勝谷・山本・坂元：アジア系留学生と日本人学生の相互知覚ギャップ

めには、特に日本人学生に対する教育が重要であることを意味しているように見える。

ただし、本研究には、いくつかの限界や今後の課題があり、それについて述べる必要がある。

本研究では、自分自身や相手の行動の意図や結果に対する知覚を調べるために場面想定法を用いた。場面想定法を用いた研究はすべてその問題を抱えるが、場面想定法で測定された傾向が、現実的なものとしてどこまで一般化できるかは明確ではない。例えば、場面想定法による測定は社会的望ましさの影響を受けやすいと考えられる。つまり、想定された場面では、一般に社会的に望ましい回答となる傾向があるため、場面想定での回答が現実のさまざまな場面での行動を予測し得ないという可能性が考えられる。今回の調査に関して言えば、実際以上に相手と接触したいと回答することなどがあげられる。しかしながら、本研究では社会的望ましさを統制した分析を行ったので、少なくともその問題は克服したと考える。

また、今回の調査で取り上げた物語は、日本人学生と留学生の興味にずれがあるために相互交流がうまくいかない、という内容であった。これは、両者が相互作用する場面の中でも特に起こりやすいと考えられる、いわば「典型的な」場面であった。こうした場面を採用したのは、これらが日常よく経験することが考えられる場面であり、その状況におかれた際の自分や相手の行動について考えやすいからと判断したためである。しかし、そのために、被験者が研究者の意図を推測して、それに沿った回答をするという要求特性が生じた可能性があるとも考えられる。本研究では、要求特性と関連が高いと見られる社会的望ましさを統制した分析を行っており、その点で、要求特性の影響をある程度は排除することができたと考えられる。いずれにせよ、用いられた場面はゼミやコンパなど限られたものであり、今後は、さまざまな場面を用いて、本研究の知見を追試する必要がある。

本研究の被験者は、日本人被験者も留学生被験者も女子学生のみであった。そのため、本研究でとりあげた被験者は限定されている。また、上述のように、日本における外国人留学生がアジア系留学生で占められている現状から、本研究における留学生被験者もほぼ同様の構成となっている。そのため、本研究の知見は、日本における現在の外国人留学生、すなわちアジア系留学生に関してはあてはめることができる結果である。文化的背景の異なるアメリカやヨーロッパなどを含む、すべての地域からの留学生に対して即座に一般化できるものではないため、本研究の知見がアジア系以外の留学生にどれだけ一般化できるのかは今後の検討が必要であろう。もちろん、性別についても、本研究の結果を男子学生に対して一般化することはできないため、さらなる検討が必要で

ある。

また、留学生被験者の35%は在籍期間が1年未満の者であった。1年未満という時期は、学生を含めた日本人との接触が本格的になる時期で、異文化への期待ばかりでなく、様々な違和感を覚え始める時期であるとされている(e.g., 井上・伊藤, 1997)。また、日本の文化や日常でのコミュニケーションに関する知識がまだ十分に蓄積されていない時期であるかもしれない。そうした被験者が対象であったために、本研究では相互知覚ギャップを示唆する結果がしばしば得られたのかもしれない。

こうしたことから、今後は、男性被験者や、在日期間がもっと長い留学生の被験者、欧米の留学生の被験者にも同様の研究を行い、知覚ギャップがどのような被験者の範囲で存在するかを確認することが望まれよう。

最後に、相互知覚ギャップの有無の確認とともに、その生起過程についての検討も意味のあるものであろう。相互知覚ギャップは、外集団メンバーに対する特徴的な知覚と見られるが、その基盤として集団奉仕バイアス(e.g., Heine & Lehman, 1997)など、いろいろな可能性が考えられよう。また、こうした知覚ギャップが相手への接触欲求に直接影響するばかりでなく、さまざまな媒介要因も考えられる。たとえば、達成動機をはじめとする留学生個人の持つさまざまな動機づけ(e.g., 樋口, 1997)や留学における目標によって、知覚ギャップが見られても接触欲求に影響を及ぼさない場合も考えられるであろう。こうした媒介要因を検討することも今後必要である。

このように、知覚ギャップの生起過程、影響過程について検討することによって、留学生と日本人学生との相互交流を促進するための方略がより明確になるであろう。

## 結 論

本研究は、場面想定法を用いている。また、場面の種類や被験者も限定されている。その点に限界はある。しかし、アジア系留学生と日本人学生の間には相互知覚ギャップがあり、それが両者の相互交流を妨げていることを示唆する実験データは、われわれの知る限り、これまでになかった。本研究は、そうしたギャップの可能性を明らかにしたものであり、少なくともこの問題が十分に研究の対象になることを示したものと言える。また、相互知覚ギャップの存在は可能性であるとしても、異文化教育の一環としてそれに関する対処を含めておくことは、無難であるとは言えるであろう。とくに日本人学生に対する教育は重要性が高いと考えられる。

## 引用文献

- Furnham, A. & Bochner, S. (1986) *Culture shock: psychological reactions to unfamiliar*

- environment. London: Methuen.
- 早矢仕彩子 (1997) 外国人就学生の自己認知、自・他文化への態度が適応感に及ぼす影響 心理学研究, 68(5), 346-354.
- Heine, S. J., & Lehman, D. R. (1997) The cultural construction of self-enhancement: An examination of group-serving biases *Journal of Personality and Social Psychology*, 72(6), 1268-1283.
- 樋口康彦 (1997) 留学生のパーソナリティ特性が在日適応感に与える影響について—達成志向性・調和志向性の観点から— 実験社会心理学研究, 37(2), 150-164.
- 星野 命 (1980) 概説・カルチャーショック 星野 命 (編) カルチャー・ショック 現代のエスプリ 161 (pp. 5-30.) 至文堂
- 井上孝代・伊藤武彦 (1997) 留学生の来日1年目の文化受容態度と精神的健康 心理学研究, 68(4), 298-304.
- 岩男寿美子・萩原 滋 (1988) 日本で学ぶ留学生: 社会心理学的分析 勁草書房
- 周 玉慧 (1993) 在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートの次元—必要とするサポート、知覚されたサポート、実行されたサポートの関係— 社会心理学研究, 9(2), 105-113.
- Jou, Y. H., & Fukada, H. (1995) Effect of social support from various sources on the adjustment of Chinese students in Japan. *The Journal of Social Psychology*, 135(3), 305-311.
- 栖原 暁 (1996) アジア人留学生の壁 日本放送出版協会
- MPI 研究会 (訳編) (1964) 日本版モーゼレイ性格検査手引 誠信書房
- 文部省ホームページ (2000) 「我が国の文教施策」(平成11年度) (<http://www.wwp.monbu.go.jp/jyy1999/index.html#toc2.11.4>)
- 長井 進 (1988) 外国人交換留学高校生の日本における適応過程 心理学研究, 59(1), 37-44.
- 多田洋子 (1995) 外国人留学生のカルチャー・ショック: ホームステイマニュアル 南雲堂
- Tajfel, H. (Ed.) (1978) *Differentiation between social groups: studies in the social psychology of inter-group relations*. London: Academic Press.
- Tajfel, H. (1982) Social psychology of inter-group relations. *Annual Review of Psychology*, 33, 1-39.
- 田中共子 (2000) 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル ナカニシヤ出版
- 田中共子・藤原武広 (1992) 在日留学生の対人行動上の困難—異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討 社会心理学研究, 7(2), 92-101.
- 山崎瑞紀 (1993) アジア系留学生の対日態度の形成要因に関する研究 社会心理学研究, 64(3), 215-223.
- 山崎瑞紀 (1994) アジア系就学生の対日イメージ形成に関する因果モデルの検討 教育心理学研究, 42, 442-447.
- 渡辺文夫 (編著) (1995) 異文化接触の心理学 川島書店
- 横田雅弘・堀江学 (編) (1994) 異文化接触と日本人 現代のエスプリ 322 至文堂
- (2000年2月14日受稿, 2001年6月20日掲載決定)